

現代日本語の静的述語のテンポラリティについて

著者	福田 嘉一郎
雑誌名	神戸外大論叢
巻	53
号	7
ページ	23-42
発行年	2002-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001175/

現代日本語の静的述語の テンポラリティについて

福田 嘉一郎

はじめに

本稿では、現代日本語（以下単に「日本語」）における主節（引用節を含まない）の静的述語のテンポラリティ（テンス性）について論じ、日本語の静的述語のテンス性は、述語が表す事態の時と発話時との関係によってではなく、述語が表す事態についての即時情報が取得される可能性のある時と発話時との関係によって決定すると記述すべきであることを主張する。また、いわゆる叙想的テンスの問題をも取り上げる。なお、

- (1) もう少し手当てが遅かったら、助からなかった。
- (2) もしけがをしていなかったら、今ごろいろんな所を旅していたでしょう。

のように、明らかに事実に反する事態を表す述語については、本稿では考察の対象としない。この種のものに発話時を基準とする現実世界の時の概念が当てはまるか否かが、今はよくわからないからである。

1 議論の前提

1・1 一般にテンス（時制）とは、述語の表す事態がある基準の時点（通常は発話時）に対し以前か、同時か、以後かによって、述語詞（動詞など）が体系的に異なる形態をとるとき、その形態的対立を指して言う。

テンスという文法範疇は元来、インド-ヨーロッパ語のものである。イン

ド・ヨーロッパ語においては、例えば英語の ‘am/was’ のように、テンスはそれを表す特定の形式が分析できない姿で、動詞の語形変化（パラダイム）の中に表現されることが多い。これに対して日本語では、「(居)ル／タ」という形式が容易に抽出される。テンスを日本語の述語詞がもつ形態論的範疇として適用することには、実は大きな問題があると思われるのである。ただし、日本語についても、いわゆる五段活用動詞、すなわち「欠ク／欠イタ」「次グ／次イダ」等の場合は、語形変化の体系を考えるほうがよいのかもしれない。

本稿では、便宜的に、「居ール」「寒ーイ」「雪ーダ」等の形と「欠ク」「次グ」等とをまとめたもの、および、「居ータ」「寒ーカッタ」「雪ーダッタ」等の形と「欠イタ」「次イダ」等とをまとめたものを、それぞれ述語の「非タ形」および「タ形」とし、前者と後者の対立を、「テンス的なもの」の意味で「(テンポラリティ＝) テンス性」と呼ぶことにする。

1・2 静的述語とは、非タ形が発話時において存在する（現在の）事態を表しうる述語のことである。静的述語となる述語詞は、おおむね(3)のように整理される。

(3) 静的述語となる述語詞

- a 「{名詞／名詞的形容詞⁽¹⁾}＋指定詞（ダの類）」
- b 形容詞
- c 静的動詞：存在を表す動詞（アル，居ル等），感覚を表す動詞（見エル，聞コエル，匂ウ，痛ム，変ナ味ガスル，悪イ予感ガスル等），思考を表す動詞（思ウ，考エル，困ル，感心スル等），関係を表す動詞（カカワル，相当スル，違ウ，意味スル等），可能動詞（読メル，書ケル等），デキル，要ル，ースギル，……
- d 動的動詞（静的動詞を除く大部分の動詞）で，習慣を表す用法のもの⁽²⁾
- e 「動詞＋ナイ」，「動詞＋（可能）ラレル」，「動詞＋ {テイル／テア

2 事態時と静的述語のテンス性

日本語の通常の文体では、静的述語の非タ形とタ形の対立に関して、(4)のような現象⁽³⁾が認められる。

(4) a 彼はきのう家に {*います／いました}。

b 彼は現在家に {います／(*いました)}。

c 彼はあした家に {います／*いました}。

したがって、非タ形とタ形の対立が発話時を基準とするものであり、日本語がテンス性をもつ言語であるということは動かないであろう。

しかし他方、静的述語のタ形が発話時以前の事態を表さない場合があることについても、多くの指摘がなされてきた。そのようなタ形の例を、先行研究から次に挙げてみる。

(5) この椅子は先刻からここにあった。 (三上1953)

(6) あ、ここにあった、長いこと探していたナイフが。 (同)

(7) 7分の1は循環小数だったね？ (同)

(6), (7)は、寺村1984が「叙想的テンス」と呼んでいるタ形の用法に該当するものである。また、(8)を見られたい。

(8) 別れた彼って背が高かったのよね。 (八亀2001)

これも、発話時にはもはや存在しない事態を表しているとはいえない。

そして、上とは逆に、発話時以前の事態を静的述語のタ形によって表しえない場合もある。(9)を見られたい。

(9) a (??)私の母は結婚する前、OLでした。

b 私の母は結婚する前、OLだったそうです。

(9) a は、歴史的叙述においては言えるであろうが、通常の対話においてはおかしく感じられる。

従来特殊な用法とされてきた(5)~(7)の類をひとまずおいても、(8)、(9)のような例は、日本語の静的述語のテンス性が、述語が表す事態の時と発話時との関係によって決まるのではないことを示している。第3節では、静的述語のテンス性は、述語が表す事態についての即時情報が取得される可能性のある時（情報時）と発話時との関係によって決まるとする仮説を提示し、これに基づいて議論する。

3 情報時と静的述語のテンス性

3・1 ここで、静的述語のテンス性を記述し、テンス性にかかわるさまざまな現象を説明するために、(10)~(12)の仮説を立てる。

(10) 話者が確言の文を用いるための必要条件⁽⁴⁾として、

a 文の述語が表す事態の時が発話時以前（過去）、または発話時を含む期間（現在）の場合、話者は事態の時におけるその事態についての情報、すなわち即時情報を取得していなければならない。

b 文の述語が表す事態の時が発話時以後（未来）の場合、次の①、②のいずれかが満たされなければならない。

①事態が発話時において人為的に予定されている。⁽⁵⁾

②事態が規則的に反復されるもののうちの一つである。

(11) 日本語の静的述語のテンス性は、述語が表す事態についての即時情報が取得される可能性のある時（本稿では「情報時」と呼ぶ）と、発話時との関係によって決定する。

(12) a 歴史的叙述の語り手とは、過去に存在したあらゆる事態についての即時情報を取得しうると想定されている話者のことである。

b どの話者も、話者自身に関する過去の事態について取得した情報は、すべて即時情報として扱うことができる。

以下、具体的に検討してゆく。

3・2 (10)について、確言とは、文が表す事態が100パーセントの蓋然性をもって現実であると、話者がとらえていることを示す叙法（ムード）のことである。確言は、文の述語が裸の非タ形または裸のタ形であることによって示される。確言の文が表す事態は、話者が有する確定した知識のなかの事柄であるといえる。確言に対して概言は、文が表す事態が現実である蓋然性は100パーセントではないと、話者がとらえていることを示す叙法である。概言は、主に文の述語が「{非タ形／タ形} + {ダロウ／カモシレナイ／ヨウダ／ラシイ／ソウダ／…}」の形であることによって示されるが、述語が裸の非タ形で、キット、オソラク、タブン等の副詞類を伴うことによっても、あるいは単に文脈によっても示されうる。⁽⁶⁾

さて、(10) a は、(13), (14)のような例によって支持される。

(13) a 彼はきのう、私が訪ねた時、家にいました。 (= (4) a)

b A : 彼はきのうどこにいましたか？

B : おとといの打ち合わせで、きのうは家にいることになっていましたから、家に {??いましたよ／いたでしょう}。

c 私の母は結婚する前、{??OL でした／OL だったそうです}。

(= (9))

(14) a 彼は、さっき帰って来て、現在家にいます。 (= (4) b)

b A : 彼は現在どこにいますか？

B : きのうの打ち合わせで、現在は家にいることになっていますから、家に {(??)いますよ／いるでしょう}。

話者が確言の文を用いるのは、文の述語が表す事態についての即時情報を取得している場合 ((13) a, (14) a) に限られる。即時情報が取得されていない場合 ((13) b, (13) c, (14) b) は、話者が事態について、事態時より前、あるいは事態時よりあとに取得した情報がどれほど確実なものであっても、日本語では概言の文しか用いることができない。(14) b の裸の非タ形「います」が用いられるとすれば、それは確言の文においてではなく、文脈から概言の文

と解釈される文（「({ きっと／おそらく／たぶん／… }) 家にいますよ」）においてである。

また、(10) b は、(15)、(16) のような例によって支持される。

(15) a 予定では、彼はあした家にいます。 (= (4) c)

(15) b 絶対に外へ出るなど言いきかせておきましたから、彼はあした家に { (?) います／いる でしょう }。

(16) a 来月はここでは毎日のように雪です。

(16) b あしたは { (?) 雪です／雪でしょう }。

(15) a は (10) b の①を、(16) a は (10) b の②を、それぞれ満たしている。(15) a、(16) a は確言の文であり、概言を示す副詞類を伴うことはできない。(17)、(18)を見られたい。

(17) *予定では、彼はあしたきっと家にいます。

(18) (*)来月はここではきっと毎日のように雪です。

(18) は、その土地に長年住んでいる人物の発話としては不適格であろう。

(10) b の①も②も満たされないとき ((15) b、(16) b) は、話者が事態の実現についてどれほどの確信を抱いていても、確言の文を用いるのは不自然⁽⁷⁾である。(15) b や (16) b の裸の非タ形が言えるとすれば、(14) b の場合と同様、文脈によって概言の文と解釈されているのである。

3・3 (11) は、(19)、(20) のような例によって支持される。

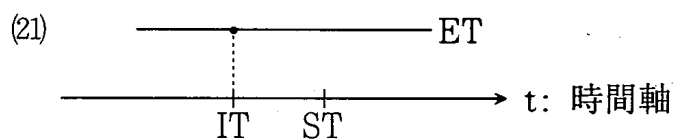
(19) 別れた彼って背が高かったのよね。 (= (8))

(20) きのう私に道を尋ねて来た人は、外国人でした。

静的述語のタ形「高かった」「外国人でした」が表す事態が、もし発話時にはもはや存在しないとすれば、状態が変化した（背が低くなった／1日のうちに帰化した）、あるいは状態の主が死亡したと解釈しなければならないが、いずれも現実的でない。このような例は、述語が表す事態は発話時においても存在するが、その事態についての情報が発話時において取得される可能性はないと話者がとらえているために、情報時が発話時以前となり、述語

がタ形をとっているものと解釈される。

上のことを図示すると、(21)のようになる。



(IT < ST → タ形)

ST (Speech Time) : 発話時

ET (Event Time) : 事態時

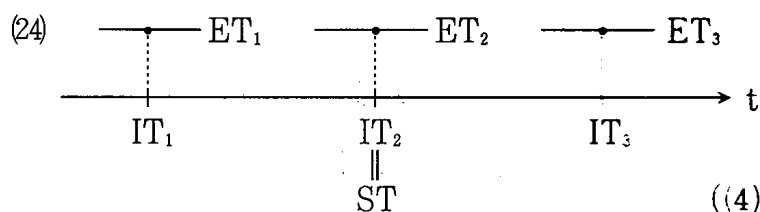
IT (Information Time) : 情報時

(19)や(20)の場合、発話時において状態主が消息不明、あるいは話者が事態についての情報を取得する意思をもっていない。これらの述語を非タ形で言うと、情報時が発話時と同時であると解釈されて、「未練があるように聞こえ」(八亀2001: p.71) たり ((22)), 話者が状態主と特別な関係にあるように受け取られたり ((23)) する。

(22) ??別れた彼って背が高いのよね。

(23) ??きのう私に道を尋ねて来た人は、外国人です。

(11)により、日本語の静的述語は基本的に、述語が表す事態の情報時が発話時に対して、以前であればタ形をとり、同時または以後であれば非タ形をとると記述することができる。例えばさきの(4)について図示すると、(24)のようになる。



((4) a : IT₁ < ST → タ形)

((4) b : IT₂ = ST → 非タ形)

((4) c : ST < IT₃ → 非タ形)

3・4 さて、情報時は、述語が表す事態についての即時情報を実際に取得しうる特定の人物が存在することを、必ずしも意味しない。確言の文において、事態時が過去または現在の場合は、(10) a の制約により、事態についての

即時情報を取得しうるのは結局話者ということになるのであるが、事態時が未来の場合、即時情報を取得しうる人物は特定されない。例えば、(25)を見られたい（2060年に人類が存続していることを前提とする）。

(25) 2060年ごろ、ハレー彗星は地球の近くにあります。

また例えば、事態時が過去または現在であり、なおかつ即時情報を実際に取得しうる人物が存在しない場合もあるが、そのような事態でさえ、概言の文の述語であれば表すことができるのである。(26), (27)を見られたい。

(26) およそ1億年前、この辺りは海だったようです。

(27) 宇宙のどこかで、知的生命体が地球との交信を試みているかもしれません。

これらは、「もしその時そこにだれかがいたと仮定すれば、『……（非タ形）』という情報が {取得できる／取得できた} {だろう／かもしれない／ようだ／…}」のように言い換えられる表現であろう。概言の文の場合、述語が表す事態についての即時情報が取得される可能性は、あくまで可能性にとどまる。即時情報取得の可能性すら考えられない事態は、すなわち話者の念頭に上らない事柄であって、言語になることはないものと思われる。

(26)や(27)は、通常の対話においては、(10)aの制約のために、確言の文とはなりえない。(28), (29)を見られたい（(29)は文脈から概言の文と解釈されるなら適格）。

(28)??およそ1億年前、この辺りは海でした。

(29)(??)宇宙のどこかで、知的生命体が地球との交信を試みています。

ところが、過去の事態を表す(28)は、歴史的叙述においては用いることができる。同様の例として、さきの(9)a, 次の(30), (31)を見られたい。

(30) 私の曾祖母は、若いころ看護婦をしていた。

(31) カラヴァッジョ（1573－1610）は、「ナルキッソス」（ローマ国立古美術館蔵）を描いた時、25歳だった。

(12)aは、(9)a, (28), (30), (31)のような例によって支持される。歴史的叙述の

語り手が取得した、文の述語が表す事態についての情報は、もちろん即時情報ではなく、事態が終了したあとで、他者の発言、記録、化石など、さまざまな証拠から取得した情報である。しかし、語り手には、過去の事態について取得した情報をすべて即時情報として扱い、事態を確言の文で表すということが許されているのである。

歴史的叙述の語り手は、上のような特殊な資格を与えられた話者⁽⁸⁾である。歴史的叙述と通常の対話とでは、話者の性格が異なるので、両者を混交させると不適格な談話が出来る。(32), (33)を見られたい。

(32) a 私の母は結婚する前、OL だった (= (9) a)。勤めていた会社は主に材木を扱っていた。……

b A : おふくろは結婚する前、OL だったそうだよ。

B : ふーん。どんな会社に勤めてらしたの？

A : 主に材木を {??扱っていた / 扱ってたらしいね}。

(33) a およそ1億年前、この辺りは海だった (= (28))。ウミガメの祖先やアンモナイトが棲んでいた。……

b A : 1億年ぐらい前は、このへんは海だったんだって。

B : へえ。じゃ、首長竜とかいたのかな。

A : さあね。ウミガメの祖先やアンモナイトは {??棲んでいた / 棲んでたみたいだけど}。

(32) a, (33) a は歴史的叙述のテキストであり、確言の文が用いられているが、(32) b, (33) b のように、対話のテキストに歴史的叙述を交えようとしても無理である。

しかしながら、(34)~(36)は、通常の対話においても適格であろう。

(34) 私はその時 {熟睡していました / 意識がありませんでした / …}。

(35) 私は生まれて間もないころは、T市に住んでいました。

(36) ビートルズが来日した時、私は3歳でした。

(12) b は、(34)~(36)のような例によって支持される。これらの場合、述語が表

す事態についての即時情報を話者が取得したということは、ありえない (34, 35) か考えにくく (36), 話者は事態時よりあとに事態についての情報を取得したと考えざるを得ない。それにもかかわらず, このような確言の文を用いることができるのは, 文の述語が話者自身に関する過去の事態⁽⁹⁾を表しているからであると見られる。

3・5 静的述語の非タ形には, 時間を超越した事態を表す用法⁽¹⁰⁾があるとされている。(37)~(40)を見られたい。

(37) 7分の1は循環小数だ。

(38) 金剛山は六甲山より高い。

(39) ジャワ島は南半球にある。

(40) 子の性別は精子の染色体で決まる。

(40)の述語は動詞であるが, (3)dの用法に該当する。このような非タ形は, 事態を時間の流れの中に位置づけることはせず, 単に, ある対象がもつ属性を表すものであると言われる。

(37)~(40)の述語は, いずれも恒常的に存在する事態を表しており, 事態についての即時情報を話者は知識として取得している。このとき, 情報時が発話時と同時にありうることは言うまでもないが, また一方で, 情報時は発話時以前であっても, 発話時以後であってもよいことになる。もっとも, 情報時が発話時以後の場合は, 情報時が発話時と同時の場合と同じく, 述語は非タ形をとるので, 形態上の問題は起こらない。それに対して, 情報時が発話時以前の場合は, 述語はタ形をとらなければならないから, 情報時を発話時と同時ととらえるか, あるいは発話時以前ととらえるかは, 形態上の問題を引き起こすわけである。

しかし, 上のような場合, (37)~(40)の述語が非タ形をとっていることからわかるように, 通常は, 情報時は発話時と同時ととらえられるのであって, 発話時以前とはとらえられない。これを言い換えれば, (41)の原則となるであろう。

(41) 静的述語が表す事態の情報時が、発話時に対して以前でも同時でもありうる場合、情報時は発話時と同時ととらえられ、述語は非タ形をとる。

(41)の対偶として、述語がタ形をとっている場合は、情報時は発話時と同時ではありえず、必然的に発話時以前ということになる。つまり、文の述語がタ形になっていれば、事態そのものの時と直接にはかかわりなく、事態についての即時情報が発話時において取得される可能性はないと、話者はとらえているのである ((4)a, (19), (20)参照)。

ところが、(37)~(40)の述語をタ形にした(42)~(45)のような例が、実際には用いられることがある。

(42) 7分の1は循環小数だったね？ (=(7))

(43) そう言えば、金剛山は六甲山より高かったな。

(44) 調べてみると、ジャワ島は南半球にあったよ。

(45) たしか、子の性別は精子の染色体で決まったよね⁽⁴⁾？

(42)~(45)のタ形は、いわゆる叙想的テンスの用法に該当する。ここまでの議論から、叙想的テンスとは、(41)の原則の例外として、静的述語がタ形をとることなのではないかと予測される。

第4節では、いわゆる叙想的テンスについて考察する。そして、叙想的テンスとは、確言の文において、静的述語が表す事態の情報時が発話時と同時でありうるにもかかわらず、一定の発話状況が与えられた場合に、情報時が発話時以前ととらえられて、述語がタ形をとる現象のことであるという主張を行う。また、その議論の中で、問題の発話状況の内容を明らかにする。

4 いわゆる叙想的テンス

4・1 益岡2000は、過去の事態を表すとはいえない述語のタ形の用法を、寺村1984に従って「叙想的テンス」と呼び、先行研究に基づいて、叙想的テンスを(46)の6種に分類している (益岡2000: p.23)。

- (46) a 発見：例「ああ、こんな所にあった」
- b 想起：例「そうだ、あしたは休みだった」
- c 確認：例「君はたしか岡山の出身だったね」
- d 命令：例「さあ、行った、行った」
- e 判断の内容の仮想：例「早く帰ったほうがいいよ」
- f 反事実性：例「僕に財産があったなら、何でも買ってあげられるの
に」

本稿では、(46) a～c の用法を取り上げる。(46) d と(46) e は動的述語の用法、(46) f は事実と反する事態を表す用法なので、考察の対象としない。

さて、益岡2000は、(46) a～c のタ形の用法には共通点が認められるとして、(47)のように述べている。

(47) 問題の三つの用法〔発見、想起、確認〕はいずれも、客観的な観点からすれば、現在時または未来時に成り立つ何らかの状態的事態を表すものである。ここで、もう一度それぞれの用法の代表的な例を挙げてみよう。

(47) あ、やっぱりここにあった。

(48) そうか、明日は駅伝があったんだ。

(49) 君のお父さんはお医者さんだったね。

これらの表現は、客観的には、現在または未来の状態を表していることは確かである。したがって、テンスの基本的原則から言えば、いわゆる（「タ形」に対する）「ル形」が使われるはずのものである。

(50) あ、やっぱりここにある。

(51) そうか、明日は駅伝があるんだ。

(52) 君のお父さんはお医者さんだね。

それにもかかわらず、(47)～(49)ではタが使われているのである。その理由は、既に述べたように、過去の時点に存在していた状況に焦点を当てたいからである。過去時に言及するにはタの使用が必要となるわけである。

ここで注意すべきは、(47)～(49)のような表現においてはタを使用しても、過去の状態を表すことにはならないことが保証されているという点である。すなわち、これらの表現については、描かれている内容からそれらの事態が現在または未来において成り立つ事柄であるということが明らかなわけである。このような保証があるからこそ、タを用いて過去時に焦点を当てることが許されるのである。

(益岡2000 : pp.31-, 下線筆者)

(47)の下線部の指摘は、叙想的テンスの問題について考える際に、最も重要な点の一つであると思われる。

4・2 さきの(41)の原則は、確言の文についてであれば、(37)～(40)のような例に限らず、すべての静的述語に適用されるものであろう。確言の文において、述語が表す事態の情報時が発話時以前の場合は、情報時と、事態についての即時情報を話者が取得した時とは、実際には同時と見なすことができる。これに対して、情報時が発話時と同時ととらえられている場合は、話者が即時情報を取得した時は、わずかな差にせよ情報時＝発話時より前である。なぜなら、確言の文を用いるためには、(10) aにより、話者は発話時において即時情報を取得済みでなければならないからである。話者は、即時情報を取得した発話時以前のその時を情報時ととらえることもできるから、結局、静的述語が表す事態の情報時が発話時と同時でありうるなら、情報時は必ず発話時以前でもありうる⁽¹²⁾ということになる。

通常は、(41)の原則がはたらいっているので、情報時が発話時と同時でありうる場合は、述語は非タ形をとり、その対偶として、述語がタ形をとっていれば、情報時は発話時と同時ではありえない。ところが、(47)の下線部にあるように、情報時が発話時と同時⁽¹³⁾でありうる⁽¹³⁾ことが文脈から明らかな発話状況の下では、(41)の原則の例外として、情報時が発話時以前ととらえられ、述語がタ形をとることがある。これがすなわち叙想的テンスと呼ばれる現象であると考えられる。

叙想的テンスとしての静的述語のタ形は、述語が表す事態の情報時が発話時と同時でありうるという前提の下に、情報時を発話時以前ととらえることによって、事態についての即時情報を話者が取得した時に焦点を当てるために用いるものであるといえよう。叙想的テンスは、確言の文にしか現れない。確言を導くに足る情報が取得された時でなければ、焦点化しえないのである。(48), (49)を見られたい。

(48) (*) 7 分の 1 は循環小数だったかもしれない。

(49) *ジャワ島は南半球にあったらしい。

恒常的な事態を表す述語のタ形は、すべて叙想的テンスのタ形となるが、それらを概言の文において用いることはできない。(48)が言えるとすれば、「循環小数」が試験などの時に答えるべきであった正解を指すような場合であり、述語が表す事態は恒常的ではない。そのときのタ形は、情報時が発話時に対して同時でなく以前であることを示すにすぎない。

4・3 さて、確言の文における静的述語が、いわゆる叙想的テンスのタ形をとるようになる発話状況は、4・1, 4・2で示した事柄のみではない。それに加えて、大きく分けて2種類の、ある状況のいずれかが与えられた場合に、初めて叙想的テンスは発現するものと見られる。

そのうちの一つは、述語が表す事態についての即時情報を話者が取得した時よりあとのどこかの時点（通常は特定されない）から、発話時の直前までのあいだ、話者が即時情報を取得することができなかったという状況である。これにより、「想起」「回想」「確認」などと呼ばれるタ形の用法が派生して来る。(50)~(52)を見られたい。

(50) そう言えば、金剛山は六甲山より高かったな。 (=43)

(51) 君はたしか岡山の出身だったね。 (=46 c)

(52) 7 分の 1 は循環小数だったね？ (=7)

また、(53)のような例は、叙想的テンスの用法には数えられないことが多いけれども、ここに含めてよいものとする。

(53) この椅子は先刻からここにあった。 (=5))

(53)は、「この椅子がここにある」という情報を、話者が「先刻」において取得したのち、その情報を（忘れてしまって）取得しえなくなり、再び、椅子がいつからここにあるのかが問題化したといった場面で用いられる表現であろう。(53)の「あった」は、即時情報取得の可能性に時間上の空白がある事態を表す点で、(50)～(52)の述語と共通している。発話時において取得される可能性のある情報は、実際に取得されてからずっと（再）取得可能ととらえられてきているのが普通であり、上に述べたような空白期間が存在するのは普通ではない。そこで、その普通でないことを示すために、話者は(50)～(53)の類のタ形を用いるのであると考えられる。

4・4 叙想的テンスを発現させるいま一つの発話状況は、述語が表す事態についての即時情報を話者が実際に取得する前に、事態に関する何らかの情報を得ようとする態度が話者にあったという場合である。ここからは、「発見」「期待の実現」などと呼ばれるタ形の用法が派生して来る。(54)～(56)を見られたい。

(54) あ、ここにあった、長いこと探していたナイフが。 (=6))

(55) たぶんそうだとにらんでいたが、やっぱり彼が犯人だった。

(56) 調べてみると、ジャワ島は南半球にあったよ。 (=44))

実際に取得された事態についての情報は、話者にとって予想どおりのものかもしれないし、思いがけないものかもしれない。いずれにせよ、話者が事態に関する何らかの情報を得ようとする態度でいるところに、その事態についての情報がもたらされると、情報を取得した時が焦点化するものと見られるが、4・2で観察したように、情報取得の時はたとえ一瞬の差であっても必ず発話時より前になる。そのような事情で、話者は(54)～(56)の類のタ形を用いるのであると考えられる。

さらに、(57)のような例もこの用法に含めることができよう。

(57) 裏門があいていました。そこから出ましょう。

(57)の第一文は、高橋1985が「てい察報告の文」(pp.291-)と呼んでいるものに相当する。この場合、情報時が発話時と同時でありうる、すなわち、「裏門があいています」とも言えるということが前提としてあるから、「あいていました」は叙想的テンスのタ形と解釈されるのである。それに対して、例えば、

(58) さっき裏門があいていました。今もあいていたら、そこから出ましよう。

では、「あいていました」は単に(11)に従って用いられたタ形としか解釈されない。(58)の場合、話者が情報を取得した時と発話時とが離れすぎていて、情報時が発話時と同時でありうるという前提が欠けているからである。

4・5 確言の文における述語のタ形には、未来の事態を表す用法もあると言われる。(59)~(61)を見られたい。

(59) そうだ、あしたは休みだった。 (=(46) b)

(60) あしたは忙しかった。

(61) あしたは会議があった。

このような例に基づいて、金水2002は、「動詞以外の静的な述語なら、だいたい未来の「た」が使える」(p.2)としている。しかしながら、筆者の観察では、静的述語であっても(62)~(64)のタ形は不適格となる。

(62)??あしたは工事でうるさかった。

(63)??そうだ、来月は金があった。

(64)??あしたはその時間、図書館で勉強していた。

(59)~(61)の類のタ形が安定するのは、述語が、

(65) a 「{名詞／形容詞的名詞} + 指定詞」

b 一部の形容詞(忙シイ等)

c (出来事〈会議、試合、催事等〉ガ) アル

d (時間、暇、休ミ、祝日、閏日等ガ) アル

から成る場合に限られるようである。これを見ると、いわゆる未来のタの用

法は静的述語一般に認められるものとはいいがたく、タ形の述語が表す事態の情報時を発話時以後と解釈するのはためられる。それよりも、静的述語となる述語詞の一部(65)には、発話時において存在する何らかの予定表の上で、未来の年月日等の特徴づけるはたつきがあると考えのほうが適當ではなかろうか。その場合、情報時が発話時と同時でありうるという前提が生じ、(59)~(61)のようなタ形の例は、4・3で見た(50)~(53)などの例と同様に、叙想的テンスの一用法と解釈することができる。ただし、用例の適格性の判定には個人差もあるようなので、今後さらに検討を深めたい。

なお、ノダという形式を伴えば、動的述語も含めたあらゆる種類の述語について、未来のタを用いるかに見える。(66)~(69)を見られたい。

(66) あしたは工事でうるさいだった。

(67) そうだ、来月は金があるんだった。

(68) あしたはその時間、図書館で勉強しているんだった。

(69) あしたは彼と{*会った／会うんだった}。

しかし、福田1998で論じたように、ノダは何らかの前提の下で述べ立ての内容が適切であることを表すもので、メタ言語を表示する形式であると考えられる。これによれば、(66)~(69)の文の構造は、それぞれ(70)~(73)のようにとられよう。

(70) [あしたは工事でうるさい] んだった。

(71) そうだ、[来月は金がある] んだった。

(72) [あしたはその時間、図書館で勉強している] んだった。

(73) [あしたは彼と会う] んだった。

述べ立ての内容は未来の事柄でも、メタ言語としてのノダが表す述べ立ての内容の適切性は発話時において存在する事態であるから、その情報時は発話時と同時でありうることになる。したがって、上のような確言の文におけるノダのタ形もまた、さきの(50)~(53)などのタ形と同様に、叙想的テンスの一用法にあたるものと解釈される。

おわりに

本稿で示した、日本語におけるテンス性をめぐる(10)~(12)の一般化は、静的述語だけでなく動的述語にも適用されるものとする。ただし、静的述語と動的述語とでは、それぞれが表す事態についての情報の性質が異なると見られる。すなわち、(74)のとおりである。

(74) a 静的述語は、それが表す事態についての情報が、状態（静止画）として与えられる述語である。

b 動的述語は、それが表す事態についての情報が、運動（動画）として与えられる述語である。

このことに関しては次稿を期したい。

(2002/10/30)

注

- (1) いわゆる形容動詞の語幹にあたる。
- (2) 動的動詞で個別の出来事を表す用法のものが、動的述語となる。動的述語の非タ形は通常、発話時よりあとに存在する（未来の）事態しか表しえない。
- (3) (4)bのタ形が言えるとすれば、それはいわゆる叙想的テンスの用法である（第4節参照）。なお、本稿で用例に付した*、?、??は、その言い方が不適格であることを示し、おかしさの度合いは ?<??<* の順となる。また、(*), (?), (??)は、それらを付した言い方が、通常は不適格であるが、用いられる状況によっては適格となることを示す。
- (4) (10)aの場合、話者が事態についての即時情報を取得していることは、確言の文を用いるための十分条件ではない。確言のためには、即時情報の内容が、確言を導くに足る確実性をもっていなければならない。
- (5) (75), (76)のような例も、人為的に予定された事態に含まれる。
 - (75) 来年は西暦2003年です。
 - (76) 彼は来年で40歳です。暦や年齢は人為的なものといえる。それらの概念をもたない文化も世界の中には存在するようである。
- (6) 田野村1990参照。なお、仁田2000は「認識のモダリティ」の一類型として「確言」を認め、「確言」を「確認」と「確信」の下位類に分けているが、本稿で言う確言は仁田2000の「確認」にはほぼ相当する。仁田2000の「確信」は、本稿では概言の一種ということになる。
- (7) (10)bの①も②も満たされなくとも、予言者は未来の事態を表すのに確言の文を用いる。

- (8) 雑俳に、
 (77) 講釈師見て来たやうな嘘を言ひ
 という知られた句がある。講釈師には語り手の資格があると見るのが普通であろうが、あえて資格がないものと見なせば、彼の話は10 a の制約を破っていることになり、その話は史実と異なる「嘘」であるばかりでなく、「見て来たやうな」と揶揄されるに値するというおかしみが生まれる。
- (9) 「話者自身に関する過去の事態」の外延については、今後の考究が必要であろう。例えば、(78)を見られたい。
 (78) a 私が生まれた時、祖父はもう死んでいました。
 b ??私が生まれた時、父は37歳でした。
 通常の対話において、(78) a は適格、(78) b は不適格と思われる。
- (10) 述語の非タ形には、動作を発話時と関係づけることなく、一般化して表す用法もあるとされる。(79)、(80)を見られたい。
 (79) 鍋にバターを溶かし、ベーコンを入れてよく炒める。
 (80) 花子、右手から出て来て、舞台中央で止まる。
 このような例は、手引書や脚本のト書きなどによく見られ、(37)~(40)のような例と合わせて、時間と関係のない事態を表す用法と記述されることが多い。本稿では、(79)や(80)の述語も動詞の(3) d の用法にあたるものと見なし、(40)の述語で代表させることにする。
- (11) (45)より、「……決まるんだったよね？」と言うほうが自然であるかもしれないが、本稿では(45)も適格と判定した。なお、ノダに関して4・5参照。
- (12) 金水2001が提示した「部分的期間の定理」、すなわち「発話時現在を含むことによってアルを適切とする状態があるとき、その状態の継続期間のうち、発話時現在以前の部分を取り出すことによって、必ずアッタも適切となる」(p.66)を、確言の文について解釈し直すと、本稿のようになるものとする。
- (13) 情報時が発話時以後のように見える場合については、4・5参照。

参考文献

- 井上 優 (2001)「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房
- 金水 敏 (1998)「いわゆる「ムードの「タ」」について—状態性との関連から—」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』汲古書院
- 金水 敏 (2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 金水 敏 (2001)「テンスと情報」音声文法研究会編『文法と音声Ⅲ』くろしお出版
- 金水 敏 (2002)「存在・出来事と情報」第2回神戸市外国語大学日本語研究コロキウム発表要旨
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 工藤真由美 (1998)「非動詞的述語のテンス」『国文学 解釈と鑑賞』63-1, 至文堂
- 工藤真由美 (2001)「述語の意味類型とアスペクト・テンス・ムード」『月刊 言語』

30-13, 大修館書店

定延利之 (2001) 「情報のアクセスポイント」『月刊 言語』30-13

高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所報告82,
秀英出版

高橋太郎 (1986) 「形容詞のテンスについて」宮地裕編『論集日本語研究(一) 現代
編』明治書院

田窪行則 (1993) 「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」益岡隆志編『日本
語の条件表現』くろしお出版

田野村忠温 (1990) 「文における判断をめぐって」崎山理; 佐藤昭裕編『アジアの諸
言語と一般言語学』三省堂

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版

仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎; 仁田義雄; 工藤浩『日
本語の文法3 モダリティ』岩波書店

丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンス—独立文と連体節—」『人文研究』
48-10, 大阪市立大学

福島健伸 (1997) 「いわゆる質形容詞の非過去形と過去形について」『筑波日本語研究』
2, 筑波大学

福田嘉一郎 (1998) 「現代日本語のノダと主体的表現の形式」『熊本県立大学文学部紀
要』5-1

福田嘉一郎 (2001) 「「タ」の研究史と問題点」『月刊 言語』30-13

益岡隆志; 田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版

三上 章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版復刊

八亀裕美 (2001) 「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究』別冊1, 大阪大学